

ソヴェエト政権が芸術に国家として介入した結果、シヨスタコーヴィチやプロコフィエフといったクラスの作曲家ですら、作風の転換を余儀なくされた。破壊的な不協和音と巨大編成で、一度聴いたら忘れられない《鉄工場》の作者モソロフもそうした一人だ。2019年に録音された今回の2曲は、いずれも大転換後の作品で、ロシアン・アヴァンギャルド時代の面影は皆無。全く別人の曲として接するべきだろう。

最後の交響曲となった第5番(1965)で、時代を感じさせるのは「葬送の音楽」的な第2楽章。3楽章形式の両端楽章は、後半で雄大な主題が歌われるのが特徴だが、その旋律線は

ロマン的な世界への回帰という意味でプロコフィエフの第7番を連想させる。ただし、その第1楽章(8分36秒)や第3楽章(3分47秒)を聴いても、交響曲的な印象を受けることはない。第3楽章の後半(8分05秒)になって、シンフォニックな絡みを聴くことができるが、それまでの平板な展開を払拭するまでには至らない。グロッケン等の打楽器を単純に主題にかぶせるのも、素朴に過ぎる。

回想的な世界に漂っているような交響曲に対し、1939年

作のハープ協奏曲は「作曲家の感性が生きている」感触を受ける。第3楽章で自然な掛け合いが牧歌的世界を導き、第4楽章で流れの速い音楽が続くと、ほっとした。調性音楽で聴きやすいから、興味をもってくれるハープリストがいるかも知れない。



■モソロフ：交響曲第5番／ハープ協奏曲

アルトゥール・アルノルト指揮モスクワ交響楽団、テイラー・アン・フレッシュマン(hp)
[ナクソス©NYCX10197] ¥1980

常盤 清 ● Kiyoshi Tokiwa

【録音評】スタジオ録音であるが、広大なスペースを感じさせる適切な響きが付加され、均整が取れたスケールの大きい演奏が整然と展開している。自然な広がり、自然なバランスの音は聴いていて気持ちがいいし、金管や打楽器のメリハリも十分に音質的にも確かな存在感がある。交響詩のようなハープ協奏曲は難しい楽器バランスを強いられるが、音楽的には上手い仕上がり。 <92>

推薦 当盤には増田良介氏による充実した日本語解説が付いており、モソロフという作曲家の生涯を辿ることができるのがありがたい。モソロフの名は、あのけたたましい《鉄工場》の作曲者として記憶されているが、その後、前衛性を厳しく批判され、さらに逮捕されてからは、穏健な作風に転向したとされている。ところが当盤所収の交響曲第5番は、3つの楽章を通じて前衛的な書法こそ用いていないが、悲劇的な響きを帯び、懐疑、慟哭、逡巡、閉塞感といったキーワードが脳裏に浮かぶ音楽になっている。もちろん、第1楽章には、のどかな田園的なテーマが出現したり、第1、2楽章でエキサイティングな響

きを発する際には、金管や弦だけではなくシロフォンを活用するなど、ソ連邦型のオーケストレーションを施し、終楽章の終盤では希望の光が差ししてくるとはいえ、全般的にきわめて舌触りが苦く、ソ連邦当局には歓迎されそうにない音楽になっているのだ。事実、作曲者が1965年に作曲した後、初演されることもなく、2019年1月26日に当盤と同じ演奏者によって、ようやく世界初演が実現したのである。弦にもう少し量感があればなど注文を付けたい点もあるが、知られざる作品を耳にすることができていることを喜びたい。1939年作のハープ協奏曲も、全4楽章の形では、前記の演奏会が初演とのことである。こちらはハープ特有の装飾的パッセージを取り込んでいる分、耳当たりがよく、当盤の独奏者も健闘している。